

2010 年度卒業論文

東部アナトリアのアルメニア人と 1896 年ヴァン反乱

学籍番号 8505047

南・西アジア課程トルコ語専攻

釘田 遼香

指導教官：林 佳世子

—目次—

序章	4
第一章 オスマン帝国のアルメニア人とナショナリズムの高まり	
第一節 オスマン帝国下のアルメニア人.....	8
第二節 19世紀の英露戦略の基本的構図	9
第三節 オスマン帝国内におけるアルメニア問題化.....	10
第二章 東部アナトリアの国際問題化	
第一節 露土戦争とアルメニアの外交政策	13
第二節 ベルリン条約	15
第三節 東部改革の推進.....	17
第四節 東部改革でのイギリスの孤立	18
第三章 1880年以降の反乱への準備とアルメニア人の動き	
第一節 1880年～1890年におけるアルメニア人の反乱への準備.....	21
第二節 アルメニア民族政党的の成立.....	22
1. アルメナカン党	
2. フンチャク党	
3. タシュナク党	
第三節 1896年以前に起きたアルメニア人の反乱.....	25
1. エルズルム事件	
2. クムカブデモ	
3. ゼイトウン事件	
第四章 1896年のヴァンにおけるアルメニア人の反乱	
第一節 19世紀のヴァン	27
1. アメリカ人宣教師に見る19世紀のヴァンの社会的状況	
2. ヴァンの人口構成	

第二節 反乱前夜のヴァン	29
第三節 ヴァンにおける反乱.....	30
第五章 結論	35
参考文献一覧	37

序章

2009年10月10日、トルコ共和国とアルメニア共和国の間で2国間の関係改善と国交樹立を謳った2つの合意文書が調印された。この合意文書への調印は、長い間対立してきたトルコ・アルメニア関係正常化への歴史的な第一歩となった。合意文書には、人々の利益に奉仕する目的で善隣関係の確立と政治、経済、文化および他の分野における2国間関係の発展に関する内容が盛り込まれており、基本的には次の3本の柱がある。¹

- ・両国の国土保全と2国間の国境再確認。
- ・共通歴史委員会を設立し1915年事件を検討する。
- ・議定書が両国の国会により承認されてから2ヶ月後に国境を開放する。

しかし、この関係正常化へ向けた合意文書は両国の意見の相違、議会での承認の行き詰まりが原因で、2010年4月22日に事実上凍結。2国間の新しい歴史をつくるために踏み出された第一歩は、先へ進むことなくそのままの状態で止まってしまったのである。

約1世紀にわたる2国間の対立の原因、トルコとアルメニアの間にある埋められない溝をもたらしたものは何なのか。それは「1915年事件」である。アルメニア人虐殺として世界に知られているこの問題は、歴史的問題の枠を越えて現在の政治分野に大きく影響し、トルコとアルメニアの両国だけでなく世界中の国々を巻き込んでいる。この問題は日本で大きく取り上げられることは少ないが、欧米諸国は今でも問題とされメディアなどで度々取り上げられている。アルメニア人虐殺問題を政治分野に利用するケースとしては、2006年10月にフランス国民議会が「アルメニア人の虐殺」を否定する発言に対し、1年以下の禁固刑もしくは4万5千ユーロの罰金を科す法案を通過させた。これは国内のアルメニア人票を獲得して大統領選を有利に進めようとする政治的意図の下で提案されたものである。また、2010年3月にはアメリカ下院議会外交委員会においても「アルメニア人虐殺」決議案が可決された。

このように政治家が歴史家の領域に干渉することでこの問題はさらに複雑化し、問題もはや「アルメニア人虐殺は本当にあったのか」という単純な問いと答えで解決できるものではなくなった。トルコとアルメニアの2国間にある問題を考えるに当たり、問題となっている事件の歴史的経緯と背景を見て行く必要がある。

1915年事件はオスマン帝国の東部都市ヴァン（Van）で発生したアルメニア人による反乱を契機に始まった。オスマン政府内でアルメニア人を居住地域から別の地域へ強制移住する作戦が計画された。それに先立ち1915年4月24日帝国内のアルメニア人政治家や作家など235人が官憲に連行され、²大部分が後に殺害されたと言われている。³そしてこれ以

¹<http://www.milliyet.com.tr/ermenistan-protokolu-zora-girdi/taha-akyol/siyaset/yazarde-tay/20.01.2010/1188258/default.htm?>

² Archavir Shiragian, *The Legacy* (Boston, 1976), p.10 [Walker 1980, p209 より].

³ 吉村 2009a、20 頁。

降、強制移住計画が実行に移される。⁴オスマン政府はアルメニア人口が多い東部アナトリアのアルメニア人をシリア、イラク方面に強制移住させた。移住先でも「アルメニア人はムスリム人口の10%を超えてはならない」「移住先で設立されるアルメニア人の村では1つの村に就き50戸を超えてはならない」⁵などの制限があり、アルメニア人に対し厳しい措置が取られていたことがわかる。強制移住の間にはアルメニア人の殺害や病気による死亡、クルド人との民族紛争、ロシア方面への逃亡などにより東部アナトリアのアルメニア人の人口は減少した。⁶

現在問題とされている1915年事件の概要は上記のとおりであるが、それ以前にも1895年から1896年にかけて第一次アルメニア人虐殺と言われている事件が東部アナトリアの各都市で起こっている。19世紀以降オスマン帝国の領土であったバルカン半島に住むキリスト教徒諸民族が独立を目指し反乱を起こす中、オスマン帝国内に住むアルメニア人の中でも自治権獲得を目指す動きが目立つようになった。ロシアによる援助とイギリスを筆頭とする他の欧州諸国の世論に訴えるため、アルメニア人居住率の高い東部アナトリアでもアルメニア人による反乱が起こり、オスマン軍がこれに交戦したことで大きな被害が出た。オスマン帝国のアルメニア人の民族運動に端を発した1895年と1896年の一連の事件は、アルメニア人民族運動の中心地であったヴァンでの事件を最後に一旦幕を閉じる。

本稿では、この1896年の事件を取り上げる。トルコ人、アルメニア人共に犠牲者の数では1915年の事件より少ないものの、オスマン帝国のアルメニア人が自治権獲得を目指し初めて武力に訴えたという点は重要であろう。1896年に起こった事件の経緯を明らかにすることにより、1915年へと続くアルメニア人共同体内における緊張の高まりと実態を明らかにしたい。

アルメニア問題についてトルコや欧米で多くの研究が行われ、今でも活発に議論が行われている。これらの研究を大別すると、アルメニア共和国や欧米のアルメニア系の研究者はこのアルメニア問題を「虐殺」とし、一方トルコ人研究者は「アルメニア人の反乱に対する争い」と虐殺論を否定する立場をとり続けている。問題とされているアルメニア人東部6州⁷が首都イスタンブールから遠くオスマン政府の支配が十分に行き届いていなかったため、政府側の資料が不足しており事件の真相解明は困難となっているのが現状である。そのため当時のアルメニア人の人口や犠牲者の数にもかなりばらつきが見られる。

アルメニア問題は現在も政治的分野での問題として取り上げられているため、研究者も自分の立場に捉われがちな傾向がある。アメリカ系アルメニア人のリチャード・G・ホヴァ

⁴ Kamuran 1983, p.215.

⁵ Kamuran 1983, p.213.

⁶ 吉村 2009a, 20 頁。

⁷ アルメニア人東部6州とはヴァン (Van)、エルズルム (Erzurum)、ビトリス (Bitlis)、エラズー (Eraziğ)、シヴァス (Sivas)、ディヤルバクル (Diyarbakır) を指す。

ニスィアン (Richard G.Hovannisian) は 1895 年から 1896 年にかけての一連の事件をトルコ人によるアルメニア人への虐殺行為であると主張し各事件の詳細な経緯、特にアルメニア人側の行動やムスリム側の犠牲者の数についても触れていない。これに対しトルコ人研究者側は虐殺論を否定し、すべての事件はアルメニア人の反乱に起因しており、彼らがトルコ人を襲撃したためトルコ人はこれに応戦したのであり、結果多数のアルメニア人が犠牲になったと主張している。⁸

比較的中立な立場でアルメニア問題を検証しているのがキャムラン・ギュルン (Kamuran Gürün) とエサト・ウラス (Esat Uras) である。キャムランは著書『アルメニア・ファイル』⁹でイギリスの外交文書をトルコ側の資料と並行して適切に用いており、事件に至るまでの経緯と事件の内容を整理しているため歴史の流れや事件の背景を知る上で貴重な資料と言えよう。エサトの著書『歴史におけるアルメニアとアルメニア問題』¹⁰ではアルメニアの起源から現代アルメニアまでを扱い、アルメニア人歴史家の発言やアルメニア新聞等を考慮しながら事件の経緯を分析しているため当時のアルメニア人の考え方や行動を知る上で極めて貴重な研究であり、客観的立場で叙述された論として評価することができる。

本論では以上のような研究を踏まえ、自治権獲得を目指すオスマン帝国内のアルメニア人と欧州列強の外交政策、それに対するオスマン政府の対応にも焦点を当てていきたい。

第三者の立場から問題を分析するにあたり英国外務省の記録が重要な資料になると筆者は考える。この問題にはイギリスが両者の仲介役を果たしていたため、帝国内の大使や領事は当時の状況に関する面では主観的な感情を交えることなくイギリス政府に報告しており、また同資料からイギリスの政治的思惑を探ることも可能となる。本稿では、キャムランの研究¹¹に引かれた史料、そして英国外務省の記録のうちアルメニア人に関する記録を編集したビラル (Bilal) の『英国文書におけるオスマン帝国のアルメニア人』¹²を活用する。

また 19 世紀から、オスマン帝国ではアメリカからの宣教師が広範な活動を見せていた。その主な機関はアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) であり、帝国西部で活動を開始した宣教師は 1850 年代に東部アナトリアへとその活動範囲を広げ、東部にいたアルメニア人に関する記述を多く残している。先にも述べたように東部アナトリアに関するオスマン政府側の資料が不足しているため、アメリカ人宣教師の報告書を研究することもアルメニア人の生活を知るうえで有効な手掛かりとなるだろう。本稿ではディルシェン (Dilşen)¹³ とハンス (Hans)¹⁴ が利用している宣教師の記

⁸ Richard 1997 など。

⁹ Kamuran 1983.

¹⁰ Esat 1988.

¹¹ Kamuran 1983.

¹² Bilal 1982, Bilal 1989.

¹³ Dilşen 2008.

¹⁴ Hans-lukas 2005.

述を利用し、東部アナトリアで生活していた宣教師の観点から当時のアルメニア人の生活状況と反乱の様子を明らかにする。

第一章ではオスマン帝国に暮らすアルメニア人と 19 世紀中葉から見られるようになったアルメニア人の組織化、それに伴う民族意識の高まりを考察する。また後にアルメニア問題にも影響を及ぼすことになるイギリスとロシアの外交政策についても触れる。

第二章では 1877 年の露土戦争終結後から始まったアルメニア人の自治権獲得のための外交政策を、サン・ステファノ条約とベルリン条約の 2 つの条約を軸に考察する。また条約締結後オスマン帝国東部の改革推進をめぐる各国の姿勢を、改革推進に積極的であったイギリスの動きを追い検討する。

第三章では自治権獲得運動に伴うアルメニア民族政党の結成、1895 年に起こった政党主導によるオスマン帝国各地におけるアルメニア人による反乱を扱う。

第四章ではオスマン帝国東部都市ヴァンにおける反乱を、1895 年から 1896 年にかけて起こった一連のアルメニア人による反乱の一例として取り上げる。ヴァンに住むアルメニア人の社会状況とその特徴、反乱の経緯を主にアメリカ人宣教師と在ヴァン英領事の記録をもとに考察する。

第一章 オスマン帝国のアルメニア人とナショナリズムの高まり

本章ではオスマン帝国下のアルメニア人コミュニティとその生活、19世紀のイギリスとロシアの外交政策、同時期のアルメニア人のナショナリズムの高まりについて述べる。

第一節 オスマン帝国下のアルメニア人

アルメニア人は元来東部アナトリアに古代アルメニア王国として勢力を誇っていた。しかし1045年古代アルメニア王国がビザンツ帝国に滅ぼされると、住民の多くは地中海沿岸あるいはバルカン半島へ移住した。¹⁵彼らは主に交易に従事していたためその職業の性格上移住は幾世紀にもわたって繰り返され、コンスタンティノーブルやキリキア（現在のトルコの東南部）にもアルメニア人が集住する社会が生まれることとなった。

オスマン帝国が建国されメフメト (Mehmet) 2世がイスタンブルを征服して以来、政治、社会、経済の観点からアルメニア人の運命は大きく変わる事となる。1461年のメフメト2世による首都イスタンブルでのアルメニア教会設立¹⁶により、アルメニア人はオスマン帝国のシステムの中に重要な地位を獲得した。その後アルメニア教会総主教ホヴァキムと共にアナトリア地方の様々な都市からアルメニア人がイスタンブルに移住させられると、イスタンブルで多くのアルメニア人コミュニティが形成された。¹⁷移住させられたアルメニア人には建築家が多く、モスクや宮殿、城壁、グランドバザール、マドラサ（イスラム教の学校）、ハمامなどの建築に携わった。¹⁸

¹⁵ 吉村 2009b、87頁。

¹⁶ メフメト2世はブルサ (Bursa) にいたアルメニア教会総主教であるホヴァキム (Hovakim) をイスタンブルへ呼び彼を総主教の座に据えた。

¹⁷ アナトリアに住んでいたアルメニア人はサマトヤカプ、クムカプ、トプカプ、エディルネカプなどの地区に定住させられた。1465年～1472年の間にメフメト2世がカラマン君侯国を征服すると、メフメト2世はこの地域に住んでいた中流階級から成るアルメニア人をチャルシャンバ、カラギュムルク、マルタなどの地区に定住させた。1514年にはセリム1世がサファヴィー朝のイスマイル1世に勝利すると（チャルディランの戦い）テブリズ、エルズルム、ケマフ、ムシュ、シヴァス、エルズインジャンを、1534年にはスレイマン1世がヴァンと周辺の村を征服し、この地域にいた職人であるアルメニア人の一部をイスタンブルに移住させた。さらに1583年にはムラト3世がエレバンとナフチヴァン周辺地域をオスマン帝国に組み込み1590年にテブリズの一部を征服すると、アルメニア人芸術家、職人、建築家、農民の一部をイスタンブルに移住させた。このように何年にも渡りアルメニア人の移住は続き、イスタンブルではアルメニア人人口が増え大きなコミュニティが形成された。Nurşen 2007, p19.

¹⁸ Nurşen 2007, p20.

このようにオスマン帝国時代、アルメニア人は比較的安定した環境の中で暮らしており、帝国内の商業と産業の分野で重要な役割を担っていた。アルメニア人はその貢献度の高さから「忠誠なる民」と呼ばれるようになり、18、19世紀にはアルメニア人の銀行家や商人が徴税請負権や貿易権を獲得し、帝国経済の中心となった。¹⁹これらの銀行家や商人、そして政府機関に務めるアルメニア人から成る富裕層が形成され、多くのアルメニア人名家が出現した。この状況下数多くのアルメニア人建築家が活躍し、有名な詩人や文学者が現れるなど芸術分野にも広く貢献した。建築家のバルヤン家はその代表的な家系である。²⁰

このように首都に住むアルメニア人富裕層はオスマン帝国におけるアルメニア社会の発展に大きな役割を果たした。さらにアルメニア人には兵役が免除されていたため人口は増加しアルメニア人社会は継続的に発展を続けていった。²¹

帝国東部に目を向けると、東部のアルメニア人のほとんどが農民であり、西部に比べ政治的影響力は少なかったと考えられる。しかしアルメニア人人口を見ると1890年時点でオスマン帝国東部には約513万人のアルメニア人が存在し、これは東部人口全体の約2割を占める。²²政治的影響力はなかったとしても、東部におけるアルメニア人の存在は無視できなかったことが窺える。

このようにオスマン帝国のアルメニア人社会は3つのグループに大別することができる。1つ目のグループはイスタンブルの富裕層のうち「アミラ (Amira)」と呼ばれる人々である。アミラ層の人々はオスマン政府に近い立場にあり、オスマン官界に進出する者も多かった。2つ目のグループは都市部の同職組合である。職業上のつながりから彼らは欧州諸国によく知られた存在であった。また19世紀中葉からアミラ層の権力に対抗するようになるのもこの同職組合である。3つ目のグループは農民層である。この層は主に東部アナトリアに存在しており、貧しい暮らしを送っていた。しかし同時にオスマン帝国内のアルメニア人の大部分を占めていたのがこの農民層であったことも事実である。²³

第二節 19世紀の英露戦略の基本的構図

19世紀の欧州の情勢の底辺には、ロシアの南下政策とそれに対抗するというイギリスという構図があった。ロシアの目的は地中海へ下る道を確保することであり、オスマン帝国の解体をすべての戦争において戦略の中心に据えていた。18世紀末から19世紀初頭にかけてロシアはさらなる領土拡大を進め、地中海へ下る通路の確保に努めていた。そのルート

¹⁹ 吉村 2009b、89頁。

²⁰ Walker 1980, pp.97-98.

²¹ Esat 1988, p.370.

²² Kamuran 1983, pp.98-103.

²³ Walker 1980, p.94-95.

は2つあり、1つ目はバルカン半島を通り南下するルート、2つ目はコーカサス地方を通り南下するルートである。ロシアがまず目を付けたのはバルカン半島に住むオスマン帝国のキリスト教徒であった。ロシアは同じ正教会であるバルカン半島の住民をイスラム教国家であるオスマン帝国から保護するという名目で、オスマン帝国の内政に干渉していた。バルカン半島で最初に反乱を起こしたギリシャを援助しその独立に貢献すると、その後も1875年のボスニアの反乱、1876年にはブルガリアとセルビアへ反乱が拡大する中で、バルカン半島への勢力拡大のためロシアは汎スラヴ主義²⁴を唱え、オスマン帝国に宣戦布告するに至る。このようにして1877年に始まった露土戦争の結果ブルガリアが自治権を獲得、セルビアが独立したもののロシアが期待していたほどバルカン半島の国々がロシアの影響下に入らないと、ロシアは南下ルートを東部アナトリアへ向けることとなる。

ロシアの動きに最も敏感だったのはイギリスである。ロシアの領土が拡大するにつれてその影響力が増すのを懸念しており、長年ロシアが続けている南下政策を阻止することがイギリスの戦略の中心にあった。イギリスの不安は当時イギリスの植民地であったインドにロシアが接近することであり、そのためオスマン帝国の解体には反対の立場をとっていた。当時「欧州の病人」と揶揄されていたオスマン帝国の滅亡後の領土分割を今のうちに決めておこうと提案したロシアに対しても反対する姿勢を見せている。²⁵

第三節 オスマン帝国内におけるアルメニア問題化

こうしたオスマン帝国を取り巻く状況の中で、オスマン帝国で暮らしていたアルメニア人の中にも変化が現れる。19世紀初頭アルメニア人コミュニティを支配していたのはアミラ層のアルメニア人有力者であった。アミラ層が成長するにつれその権力は増し、総主教座に対する発言権を持つほどにまで成長した。アルメニア総主教座では1840年以前にアミラ層のアルメニア人と聖職者から成る大規模な会議が開催されていた。²⁶このアミラ層に対し欧州、特にフランスとオーストリアで教育を受けた若者がイスタンブルに戻ると民主主義の思想を広めるようになり、それまで独占的に権力を握っていたアミラ層に異を唱えるとアルメニア人コミュニティの中でも権力争いが生まれる。さらに1839年ギュルハネ勅令

²⁴ 汎スラヴ主義とはスラヴ民族の連帯と統一を目指す思想運動のことである。

²⁵ 1853年ロシア皇帝ニコライ1世はイギリス大使に「ここに瀕死の病人がいる。私たちが必要な準備をする前に突然死んでしまったら、大変なことになる」と伝え、クレタ島とエジプトはイギリス領に、モルダヴィアとセルビア、ブルガリアはロシア領にすることを提案している。Jacques Ancel, *Manuel Historique de la Question d'Orient 1792-1923* (Paris, 1923), p.143[Kamuran 1983, p.74より]。

²⁶ Vartan Artinian, *The Armenian Constitutional System in the Ottoman Empire 1839-1863* (Istanbul, 1988), pp.28-29 [上野 2009, 5-6頁より]。

によりタンジマート改革が始まった頃からアルメニア人の中でも民族意識の高揚が見られ、それに伴い首都イスタンブルではアルメニア人の組織化が進んだ。1847年にはオスマン政府の承認を得てアミラ層と同職組合から成る俗人評議会と聖職者から成る聖職者評議会が結成された。さらに俗人評議会の構成員を選出するにあたり開かれていた会議が制度化され、共同体議会が開催されるようになった。アミラ層の影響力を弱めることを目指す同職組合と権力を維持し続けようとするアミラ層の動きと共に、共同体議会は徐々にその姿を変え進化していった。当初アミラ層により構成されていた議会の構成員に占めるアミラ層の割合は減り、聖職者や西欧帰りの知識人が加わった。1856年にスルタンにより改革勅令が發布されると、アルメニア人共同体は新しい規則をつくりアミラ層の権力を完全に排除しようとした。その結果1859年に行われた議員の再選では、アミラ層のアルメニア人有力者の大部分は参加することができなかった。²⁷また1855年には総主教座内に憲法起草委員会が設置され、1857年に第一草案が完成、1860年の第二草案は政府の承認を求めることなく施行され、1863年にオスマン政府の承認を受けた。²⁸

このようにアルメニア人はオスマン帝国と大きな問題を起こすことなく、またオスマン政府や他の国の干渉を受けることなくコミュニティ内の問題を取り扱うことができた。議会と憲法も制定され、この状況をキャムランは「土地を持たない自治国家」状態であったと表現している。²⁹

この状態の中、1870年代にバルカン半島でオスマン帝国からの独立を目指したキリスト教諸民族の反乱が次々と起こると、アルメニア人の中でも自治権獲得を目指す動きが目立って現れるようになった。

国内のアルメニア人、特に東部のアルメニア州を問題として取り上げたのはムクルティチ・フリミアン (Mkrtich Khrimian) である。³⁰フリミアンは1869年にイスタンブル総主教に選ばれた。フリミアンは総主教座に就くとすぐに東部のアルメニア州の状況を議題に取り上げ、各州の主教に各地のアルメニア人が置かれている状況と問題を知らせるよう指示した。1872年2月にこれを基に作成された覚書が大宰相に提出されると、これを受けたオスマン政府は東部の問題を調査するためムスリムとキリスト教徒から成る委員会を設立した。

さらにフリミアンは共同体議会の議員数を140人から50人へと減らし、聖職者以外の議員の半数をイスタンブル以外の州から選任するよう要求するなど地方重視の姿勢を見せた。

²⁷ Kamuran 1983, p.67.

²⁸ 上野 2009、12-13 頁。

²⁹ Kamuran 1983, p.68.

³⁰ Mkrtich Khrimian は1820年ヴァンで生まれた。21歳のときにアララト (Ararat) とエチミアジン (Etchmiadzin) を訪れた後イスタンブルへと向かいそこで教師になる。1854年聖職者になり、ヴァンとムシュ (Muş) で任務を果たす。ヴァンとムシュ滞在中に『ヴァンの鷲』『ムシュの鷲』という名の新聞を発行し東部の問題を指摘。聖職者になり15年目、49歳という若さでイスタンブル総主教となる。Walker 1980, p103; Kamuran 1983, p.82.

しかしこの要求は反対にあい、イスタンブル出身の議員と地方出身の議員の論争の原因となった。³¹要求が通らず議会在自分の指示に従わないと 1873 年フリミアンは総主教を辞職した。しかしフリミアンと彼の支持者はその後も活動を続け、1878 年露土戦争終結と共に再び表舞台に現れアルメニア問題の国際化に努めることとなる。

フリミアンによる各州の調査で東部アナトリアにおけるアルメニア人の問題が明らかになった。報告によると、東部のアルメニア人には法外な徴税が課され役人は腐敗し、クルド人の略奪行為に悩まされていたという。またイスラム教を基礎とした法廷でキリスト教徒の証言は認められないなど、不平等な扱いを受けていることが報告された。³²しかしフリミアンの努力により明らかにされたこれらの事実にも関わらず、首都イスタンブルから離れていることもあり特別な措置がとられることはなかった。

アルメニア人はオスマン帝国のあらゆる地域に散在していたため、バルカン半島のキリスト教徒ほど一体感がなかったと考えられる。それゆえバルカン半島で起こったような大きな反乱にも繋がらなかったため、1870 年代前半まで欧州諸国がアルメニア人に関心を持つこともなかった。³³しかし 1870 年代後半から状況は一変する。1875 年にヘルツェゴヴィナが、さらに 1876 年にはブルガリアがオスマン帝国からの独立を求め反乱を起こすと列強が介入し、オスマン政府に同地域の改革を求めた。そしてバルカン半島でブルガリアが自治権を獲得すると、この事実を知ったアルメニア人の中にも自治権獲得の欲求が生まれ、列強に目を向け始めたのである。同時にオスマン帝国のアルメニア人は、露土戦争以降バルカン半島から東部アナトリアへ目を向けたロシアやロシアに対抗するイギリスの戦略に組み込まれていくことになる。

³¹ Kamuran 1983, p.83.

³² G.Rolin-Jaequemyns, 'Armenia under the Treaty of Paris of 1856', *Armenia* (Boston, 1906), vol. II no.7, pp.21ff.[Walker 1980, p103 より].

³³ Kamuran 1983, p.78.

第二章 東部アナトリアの国際問題化

前章ではオスマン帝国下に暮らすアルメニア人と、彼らを取りまくオスマン帝国内外の状況について見た。帝国内の非ムスリムでありながらある程度自由を容認されていたアルメニア人の中でイスタンブルを中心に組織化が進み、西欧帰りの知識人やバルカン半島のキリスト教徒の影響を受けた。そして帝国東部ではアルメニア人が抑圧されているという問題が表に出たことも相まって、帝国内における自治権獲得を要求するようになった。

本章では露土戦争後の自治権獲得を目指すアルメニア人の外交、ベルリン条約で定められた東部改革の推進におけるイギリスとロシアの戦略とオスマン帝国の取り組みについて述べる。

第一節 露土戦争とアルメニアの外交政策

1877年4月24日にロシアの宣戦布告により開戦された露土戦争はオスマン帝国の敗北に終わり、混乱していたオスマン帝国の基盤をさらに揺るがせるものとなった。当初はロシア軍への反撃を続けたオスマン帝国であったが、東部にあるエルズルム（Erzurum）を占領され西部ではエディルネ（Edirne）までの進軍を許してしまい、さらにプレヴネ（Plevne）をも占領されイスタンブルへの道が開けると、オスマン帝国の要望により1878年1月31日にエディルネで講和条約が結ばれ、この戦争はオスマン帝国の敗北に終わった。

アルメニア共同体はオスマン帝国内で自治権を獲得するため、ロシアへの接近策をとっていた。露土戦争終結前後、アルメニア共同体はオスマン帝国のアルメニア人のためにロシアに3つの要求をしている。³⁴

1. ユーフラテス川までの領域はオスマン帝国に返還されず、アララト州と併合されロシアの支配下に置かれること。
2. 併合された領土では、アルメニア人に対しブルガリアに与えられた権利と同じ権利が（ロシアの）皇帝陛下により与えられること。
3. （ロシア）政府により改革が実施され確実に安全が確保された後、ロシア軍は占領した領土から撤退すること。

さらに戦争が終わるとオスマン帝国のアルメニア人代表者はエディルネへと赴き、当時のロシア皇帝アレクサンダー2世へ手紙を渡している。そこにも東部アナトリアに住むアルメニア人の状況と、バルカン半島のキリスト教徒のようにアルメニア人にも権利を与えるよう要求する旨が書かれていた。これと似た内容の手紙が宰相ゴルチャコフにも送られている。しかしこれらの努力にも関わらず、講和条約にはアルメニア人に関する記述が見ら

³⁴ Esat 1988, p.439. ()内は筆者の補足による。

れなかった。³⁵

その後 1878 年 3 月 3 日、ロシアとオスマン帝国の間でサン・ステファノ条約に向けた話し合いが始まると、今度は総主教自らロシア司令官ニコラスを訪問し、条約にアルメニア人に関する記述を盛り込むよう要求した。

条約の署名は翌日に迫っていたが、ロシアはアルメニア側の要求を聞き入れサン・ステファノ条約第 16 条には東部アナトリアの改善と改革、アルメニア人の安全保障に関する記述が加えられた。³⁶この事態に対しオスマン政府は、前日の話し合いの時点でアルメニア人に関する記述はなかったと反発を示した。しかしオスマン側は露土戦争での敗北者であったため新しい条項を認めるようロシアに言われると、半ば強制的にアルメニア人に関する条項を認めざるを得なかったのである。

サン・ステファノ条約である程度の成功を収めた後もアルメニア人は自治権獲得のため東方問題の国際化に向けた努力を続けた。アルメニア人はオスマン帝国内の状況を列強に訴えようと、ロシアの次はイギリスへの接近を試みる。例えば 3 月 17 日、アルメニア総主教がイスタンブルにあるイギリス領事館を訪れている。訪問時に総主教がアルメニア人について説明した内容は領事レイヤード (Layard) によりイギリスに報告されている。

昨年総主教は、アルメニア人はオスマン帝国の支配に不満を持っておらず、ロシアの支配下に入るよりは現状のままが良いと言っていました。さらに彼はオスマン軍に参戦するという意志があり、オスマン帝国領土の防衛のため国内の軍に組み込まれる覚悟もできていたと表明していました。私が昨日総主教と会ったとき、彼は状況はこのようであったと告白しました。しかしロシアが戦争に勝利し、とりわけアルメニアの改革のための条項を規定すると、アルメニアの事情は変わったと言いました。(中略) 今アルメニア人は権利獲得を主張することを決定し、仲間である他のキリスト教徒と同じ位置づけを主張しています。もし正義と欧州諸国の介入により彼らの要求が聞き入れられなければ、彼らはロシアに訴え併合されるまで扇動し続けるつもりなのです。総主教が言うには、すでに多くのアルメニア人はロシアに割譲された領土へ移住する準備をしているらしいのです。(1878 年 3 月 18 日付)³⁷

レイヤードのこの報告から、クリミア戦争以来イギリスとロシアが敵対関係にあるということを知っていたアルメニアは、イギリスに接近するにあたり駆け引きに出たということがわかる。当然イギリスとしてはアルメニア人がロシアの支配下に入るという事態は避けたかった。なぜならアナトリア東部のアルメニア人がロシア側につくということは、ロシアの地中海への南下政策を容易にすることに他ならなかったからである。また東部アナ

³⁵ Kamuran 1983, p.105.

³⁶ Esat 1988, p.447.

³⁷ F.O.424/68 No.639[Bilal 1982, pp.161-162 より].

トリアの併合とそれに伴うロシアの南下は、イギリスが支配していたインドへの重要な交易路を脅かすという点でイギリス経済に大きな打撃を与える要因になりうるという恐れがあった。さらにはオスマン帝国に多額の投資をしていたイギリスは³⁸、東部の反乱でオスマン帝国がさらに衰退すると相当の不利益を受けることになるため、オスマン帝国のアルメニア人がロシアの支配下に入るのを阻止したいと考えていた。そのためイギリスはベルリン条約締結以降アルメニア人の主張を支持する姿勢を見せることになる。

第二節 ベルリン条約

サン・ステファノ条約の内容がバルカン半島と東部アナトリアにおけるロシアの影響力の拡大させるものであったため、懸念したオーストリアとイギリスは、条約の条項が公開されると同時に反発を示した。イギリスは東部アナトリアの問題はロシアとオスマン帝国間で決めることではない、パリ条約に参加した国々で決めることであると主張し、条約改正を認めさせるため艦隊をマルマラ海へ、またインド軍をマルタへと送り込んだ。ロシアは戦争による疲弊とオーストリアとの友好関係を保つためイギリスの要求に従うことを余儀なくされた。³⁹

サン・ステファノ条約の破棄が決定されるとアルメニア人はサン・ステファノ条約で獲得した東部アナトリアに関する条項が取り除かれることを懸念し、再び欧州諸国に東部アナトリア問題について説明をするため奔走する。ムクルティチ・フリミヤンを含む代表団はローマ、パリ、そしてロンドンへと向かった。⁴⁰一行はフランス外相とドイツ、イギリスの大使と会談した際以前送った覚書を再度提出し、東部アナトリアの状況を再び訴えた。そこには主に、東部アナトリアに住むアルメニア人は他のキリスト教徒の状況に比べ抑圧されていること、アルメニア人はオスマン帝国からの完全独立は望んでおらず、アルメニア人は他のキリスト教徒と同じ権利を要求しており、特に人口の大部分がアルメニア人で構成されているエルズルム、ヴァン、ディヤルバクル北部における自治権の容認を望んでいることなどが書かれていた。⁴¹そして諸外国との接触が終わり準備が整うと、会議が行われるベルリンに向けて出発した。

ところで、代表の一人であるコーレン（Khoren）は一行と離れロシアへ赴きロシア皇帝に謁見している。コーレンの報告によると、ロシア皇帝は彼を見ると好意をもった態度で

³⁸ Esat 1988, p.447.

³⁹ Esat 1988, p.457.

⁴⁰ Esat 1988, p.466.

⁴¹ *Armenia*, a newspaper published by Minas Cheraz, Headmaster of the Galata Armenian School and one of the members of this delegation. 1890, no.3[Esat 1988, pp.467-468 より].

接し、アルメニア人を褒め称え、ベルリン会議で彼らの要求が受け入れられるよう最善を尽くすと約束したという。⁴²

その後 1978 年 6 月 13 日、サン・ステファノ条約改正のためにドイツの宰相ビスマルクの主導によりベルリン会議が開かれ、アルメニア代表団の努力によりアルメニア人の国際問題化は成功した。その結果イギリス代表とオスマン政府により、ベルリン条約第 61 項ではアルメニア人自治に関し「オスマン政府は、アルメニア人が居住する諸州で要求される改善と改革の実行ならびにチェルケス人やクルド人の攻撃に対する住民の安全保障がこれ以上滞らないよう努める」⁴³という取り決めがなされた。しかしベルリン条約ではあくまで東部アナトリアの改革が言及されたにとどまり、アルメニア人の自治権に関する記述は見られなかった。

この事態を受け、アルメニア人代表団はパリにいるロシア大使にこの状況を訴えた。しかしそれまで友好的であったロシアは、「ロシア側の政策と東部のキリスト教徒の問題は関係ない」と言ってアルメニア人の訴えを拒否したのである。⁴⁴

それまで協力的であったロシアの態度が一変したことにアルメニア人側は失望し、ベルリン会議に対し抗議文を送っている。そこには次のような記述が見られる。

アルメニア代表団による正当かつ穏健なる提案が拒否されたことに、アルメニア人は大いに失望した。我々アルメニア人は列強の道具として行動したことは一度もなく、オスマン帝国に住む他のどのキリスト教徒よりも攻撃や略奪行為にさらされており、オスマン政府の悩みの種となったこともなく、いかなる列強とも同じ民族ではない。そんな我々は他のキリスト教徒と同じ権利を受けることができるという希望を抱いていた。我々は援助と保護を受けることができ、アルメニア政府の管理の下に成るアルメニアで生きることができるものと考えていた。⁴⁵

こうして 1878 年に結ばれたベルリン条約はアルメニア人の独立に対する期待をさらに高めるものであったにも関わらず、結果として自治権獲得を達成できなかった。オスマン帝国が露土戦争に敗北することで、バルカン半島で独立を果たしたキリスト教徒と同じくアルメニア人も自治権を獲得するという希望は簡単には叶えられなかったのである。

⁴² Esat 1988, pp.462-463.

⁴³ 吉村 2009b、 89-90 頁。

⁴⁴ Esat 1988, p.492.

⁴⁵ Esat 1988, p.492.

第三節 東部改革の推進

東部アナトリアの改革にあたり注目したいのが1878年にイギリスとオスマン帝国の間で締結されたキプロス島に関する合意である。その内容はロシアがオスマン帝国の領土に侵攻してきた際にイギリスは武力をもってこれらの領土を保護し、その代償としてオスマン政府は東部の改革に必要な措置をとり、改革の実施に必要な手段を確保するためイギリスのキプロス島の利用権に合意すること⁴⁶というものであった。この合意に基づき、イギリス外務大臣ソールズベリー (Salisbury) は8月8日レイヤードに東部改革を進めるようオスマン帝国に圧力をかける指示を出している。ロシアの南下を懸念していたイギリスにとってアナトリア東部地域の安定は重要課題の一つであり、当時アルメニア人がオスマン帝国からの完全独立を目指しておらず帝国内での自治権を要求していたことを知っていたイギリスは、オスマン帝国安定のためアルメニア人の主張を支持する姿勢を見せていた。⁴⁷

オスマン帝国はというと、東部行政の核となる特別憲兵の配置や法整備を考えていた⁴⁸ことから見て、東部改革に対し反対ではなかったことが窺える。しかし当時のオスマン帝国の財政状況は厳しく、改革に必要な予算を確保するのは相当困難であった。アブデュルハミト2世はイギリスに600万ポンドの融資を要求したがイギリス側はこれを受け入れず⁴⁹、ベルリン条約締結後しばらくの間東部改革は保留となった。

一方ロシアはこの状況下、再びアルメニア人に接近し「東部改革は実施されない」との噂を流しオスマン帝国に対し反乱を起こすよう仕向ける策をとっていた。⁵⁰これを受け多くのアルメニア人がロシア側に移住を始めたが、これはロシアの計算外の事態であった。なぜならロシアの狙いはオスマン帝国内で自治権獲得を目指すアルメニア人に反乱を起こさせ、オスマン帝国を衰弱させることにあったからである。⁵¹

ロシアのこの不穏な動きを察知したレイヤードは、宰相イスマイル・ハック・パシャ (İsmail Hakkı Paşa) に一刻も早く東部に住むアルメニア人の安全を保障するよう警告している。イスマイル・ハック・パシャはこれに対し、今のところアルメニア人の様子は平穏であり、心配されているような虐殺などは見当たらないので誇張されているだけであろうとの返答をしておりこの事態を深刻に受け止めなかった様子である。⁵²

しかし東部におけるアルメニア人の状況はオスマン政府が考えていたよりも深刻であった。露土戦争後に結ばれた2度にわたる条約で自治権の獲得が不成功に終わると、もはやこれまで通り平和的解決に頼る姿勢ではアルメニア人の自治権は獲得できないと考え、武

⁴⁶ Esat 1988, pp.491-492.

⁴⁷ Richard 1997, p.209.

⁴⁸ Kamuran 1983, p.114.

⁴⁹ Kamuran 1983, p.114.

⁵⁰ Kamuran 1983, p.114.

⁵¹ Kamuran 1983, p.115.

⁵² F.O. 424/74, No.388[Bilal 1982, p.213 より].

力に走る者が出てきていた。アルメニア教会総主教はイギリス大使との会話で「欧州諸国の注意を引くために反乱が必要であれば、アルメニア人がそれを実行するのはさほど難しいことではない」と反乱の可能性を示唆したという。⁵³

1878年12月4日、大宰相サフフェト・パシャ（Saffet Paşa）が解任され代わりにハイレッティン・パシャ（Hairettin Paşa）が大宰相の地位に就き新政権が発足すると、イギリスは直ちに東部改革を実行するように要求した。この要求を受け、東部の状況を探るためハイレッティン・パシャは1879年2月、エルズルム、ヴァン、アレppo、ディヤルバクルに視察団を派遣する。⁵⁴エルズルムに派遣された視察団に対し、総主教座により準備されたエルズルム州の改革草案がエルズルムのアルメニア住民の名で提出された。同改革草案はイスタンブールのイギリス大使にも提出されており、そこにはムスリム主導の政府に対する不満や行政、司法、治安、徴税に関する具体的な改革案が46項目にわたり書かれていた。

55

これを受け警察と憲兵の配置が必要であるとの判断が下されたが、先にも述べたように当時のオスマン帝国の財政状況はかなり圧迫していたため1879年も改革に向けた進展は見られず、オスマン政府とイギリス、アルメニア総主教座の間で話し合いが続けられただけであった。

第四節 東部改革でのイギリスの孤立

オスマン帝国東部改革に最も熱心に取り組んでいたのはイギリスであった。1880年3月にイギリスで選挙が行われ、アルメニア問題に強い関心を持っていたグラッドストーン（Gladstone）が首相に、グランヴィル（Granville）が外務大臣になると、東部改革に関しイギリスはそれまでソールズベリーがとっていた独自路線を変更し列強との協調路線を取るようになる。グランヴィルは5月にパリ、ベルリン、ヴィエナ、サンクトペテルブルク⁵⁶、ローマにいるイギリス大使に、オスマン政府の東部改革の実行に対し圧力をかけるように各国政府を説得してほしいとの手紙を出している。⁵⁷また1880年6月にレイヤードの代わりにゴッシェン（Gochen）がイスタンブール領事に就任すると、欧州列強間で東部改革の件では行動を共にするという合意がなされた。そして6月13日に欧州諸国からオスマン政府に東部改革を催促する手紙が届いた。これに対し当時オスマン帝国の外務大臣であり

⁵³ Kamuran 1983, p.115.

⁵⁴ エルズルムとヴァンへはユスフ・パシャ（Yusuf Paşa）、アレppo（Aleppo）へはサーイト・パシャ（Sait Paşa）が派遣された。Kamuran 1983, p.117; Esat 1988, p.529.

⁵⁵ Esat 1988, pp.519-528; Kamuran 1983, p.117.

⁵⁶ 1712～1918年までロシア帝国の首都であった。

⁵⁷ Kamuran 1983, p.118.

以前クルド人地域で視察を行っていたアビディン・パシャ (Abidin Paşa) は7月5日に欧州諸国宛てに東部改革の件に対し返事を書いている。そこにはオスマン帝国は現在困難な状況にありながらも東部改革を忘れたわけではなかったことや、視察団を派遣し東部改革が叫ばれている理由と取られるべき措置について調査したこと、またその具体的内容などが書かれていた。⁵⁸

アビディン・パシャの欧州諸国に対する回答には東部改革に関し十分な内容が書かれていたにも関わらず、欧州諸国はこの内容に異議を唱えた。⁵⁹特にイスタンブル領事ゴッシュェンは英国外務省にオスマン政府は欧州諸国が送った手紙に返事すらしていないと虚偽の報告をしている。⁶⁰

東部改革は目立った進展を見せないまま3年が経過した。そのためこの問題が長引くと、イギリス主導のオスマン帝国東部改革に関し疑問を抱く国が出てきた。

既に述べたようにロシアはもともとアルメニア人の自治権獲得に賛成ではなかった。ギリシャの独立とモンテネグロの領地拡大などにより、バルカン半島での影響力が弱まった今、オスマン帝国東部に住むアルメニア人が自治権を獲得し後に独立するのは避けたいと考えていたからである。さらに1881年3月にロシア皇帝アレクサンダー2世が殺害されると、ロシア国内で反自由主義が広がり東部改革に対する見方が厳しくなった。⁶¹

イギリスは1881年12月にアブドゥルハミト2世が東部改革に対する準備を何も行っていないという情報を得るとドイツに接近し、ドイツの首相ビスマルクにオスマン政府に東部改革の件に関し圧力をかけるよう要請した。しかしドイツ側の返事は、「今オスマン政府に改革を急がせることが得策かどうかわからない。なぜならスルタンは度重なる催促に怒りを表しているだけであるからだ。私はこれ以上オスマン政府に圧力をかけず、欧州諸国による勧告を反映するための時間をオスマン政府には与えるべきだと思う」⁶²という否定的なものであった。それまでイギリスと歩調を合わせてきたドイツであったが、1883年5月に東部改革には関与しない意向をはっきりと示した。⁶³

オーストリアも例外ではなく、スルタンとの友好関係を維持し続けるためにはこれ以上イギリスと行動を共にできないという態度を隠さなかった。⁶⁴さらにはフランスもロシアと

⁵⁸ Esat 1988, pp.530-532.

⁵⁹ Esat 1988, pp.533-540.

⁶⁰ F.O. 424/107, No.194[Kamuran 1983, p.122 より].

⁶¹ Kamuran 1983, pp.122-123.

⁶² F.O.424/123, No.235[Bilal 1989, pp.376-377 より].

⁶³ ビスマルクは、ドイツは自国の利益になる範囲内であればイギリスと共に行動し、イギリスのエジプトに関する政策やベルリン条約の規定に関しても支持してきたこと、しかしアルメニア問題に関してはイギリスの政策にこれ以上従うことはできないこと、またオスマン政府への度重なる圧力は敵に対し彼自身を弱くみせることになることやオスマン政府には自国の問題を解決するための十分な力を取り戻す時間が必要であると述べている。

F.O.424/140, No.28[Bilal 1989, pp.460-462 より].

⁶⁴ Kamuran 1983, p.125.

の関係を維持するためイギリスに協力する姿勢を見せなくなった。⁶⁵こうして 1880 年以降列強との協調路線を取っていたイギリスだが、東部改革の分野で孤立してしまうことになる。

ドイツが最初に否定的な態度を見せた後、イギリスはこれ以上列強の支持を得ることが不可能であると考えようになりオスマン政府に対しキプロス合意の話を持ち出した。1883 年 5 月 10 日、イギリスはスルタンを訪れキプロス合意について触れている。イギリスは、もしオスマン政府が彼らの義務である東部改革を実行しなければイギリス側もロシアが侵攻してきた際にオスマン帝国を保護するという約束も反故にすると脅迫した。しかしスルタンはイギリス大使に、その場合イギリス軍がキプロス島に駐在する意味もなくなるのではないかと逆に疑問を投げかけたためイギリスの脅迫は失敗に終わった。⁶⁶

1886 年にイギリス政権が変わると共に新外相ローズベリー (Rosebery) はオスマン政府にベルリン条約第 61 項の内容を再確認するよう覚書を送りつけたが、これに対し大宰相メフメト・キヤーミル・パシャ (Mehmet Kamil Paşa) はこの覚書を送り返すなど非協力的な態度を見せている。⁶⁷その後もイギリスは東部改革に固執し続けたが、他国やオスマン政府の協力が得られなくなり、東部アナトリアの改革は 8 年間の歳月を経てもほぼ進展を見せなかった。

このようにベルリン条約締結後東部改革が実施されないと、アルメニア人の間にもはやオスマン政府と欧州諸国は当てにできないという空気が広がり、1880 年以降民族政党が設立され、国内外を問わずアルメニア人の民族運動が活発化していくこととなる。

⁶⁵ Walker 1980, p.148.

⁶⁶ Kamuran 1983, p.125.

⁶⁷ Kamuran 1983, p.126.

第三章 1880年以降の反乱への準備とアルメニア人の動き

以上見てきたように露土戦争でオスマン帝国が敗北すると、条約で他の帝国内のキリスト教徒と同じ権利を得るためアルメニア人代表団は欧州各国にアルメニア人の状況を訴え自治権獲得を主張した。これによりアルメニア問題の国際化は成功したものの自治権獲得にはつながらなかった。さらにベルリン条約に規定された東部改革が一向に実行に移されない、アルメニア人は欧州諸国に任せているだけでは何も変化しないと考えるようになり武力に訴えるようになる。

本章では1880年代以降進むアルメニア人の反乱への準備とロシアのアルメニア人の影響、自治権拡大の運動の結果国内外で設立された民族政党や、それらの政党の主導によりオスマン帝国各都市で起こった事件について述べる。

第一節 1880年～1890年におけるアルメニア人の反乱への準備

これまで欧州列強の注意を引くためアルメニア教会組織を中心に奔走してきたアルメニア人だったが、東部改革実施の兆しが見えないと武力で解決しようとする動きが見られるようになった。特に隣国ロシアに住むアルメニア人の活動はオスマン帝国のアルメニア人の活動より活発で、ロシアからオスマン帝国側へと国境を越え侵入するアルメニア人が後を絶たなかった。ロシアのアルメニア人はオスマン帝国の同胞を救うという目的で、オスマン帝国内に武器を持ち込み東部地域のアルメニア人農民を組織して反乱部隊を作ろうとしていた。1880年11月には50人の武装アルメニア人が国境を越えオスマン帝国内に侵入したがオスマン軍が派遣されたため直ちに退いたこと、しかし武器はエルズルムに住むアルメニア人に預けられたことが東部都市エルズルムのアルメニア人主教により報告されている。⁶⁸またヴァンのロシア副領事はロシア帝国の都市トビリシ (Tbilisi) やオスマン帝国の東部地域を回り確認した結果、アルメニア人の間に反乱の動きが広まっているのは確かであり、国境越えの準備をしているアルメニア人の数は5万人に上ると報告している。⁶⁹

実際にはロシア帝国のアルメニア人の状況は、オスマン帝国のアルメニア人に比べると悲惨であった。オスマン帝国のアルメニア人のような兵役の免除、アルメニア教会の公的地位獲得、学校の自由な設立などはロシアのアルメニア人には認められていなかった。それどころかアレクサンダー2世が殺害された後ロシア人のナショナリズムが高まる中で言論の自由は統制され、後にゴリツィン (Golitzin) がカフカース総督に就任するとアルメニア人の学校、教会は閉鎖された。⁷⁰この状況下でロシアのアルメニア人は隣国オスマン帝国

⁶⁸ F.O.424/107, No.213[Bilal 1989, pp.152-154 より].

⁶⁹ F.O.424/122, No.35/1 [Bilal 1989, pp.188-190 より].

⁷⁰ Esat 1988, p.617.

に目を向け、彼らと共にアルメニア国家を建国する思いが一層強かったものと考えられる。

オスマン帝国のアルメニア人の欧州諸国への期待が失望に変わったことも相まって、オスマン帝国内でもロシアの同胞の動きに感化され反乱行為が活発化した。特に 1880 年から 1883 年の間に多くその活動が確認されている。これに対しオスマン政府によるアルメニア人への監視の目は厳しくなり、警察部隊が設立され、またいくつかの地域では新聞の発行が禁止されたりとアルメニア人の運動は取り締まられるようになった。1882 年 12 月にはエルズルムでアルメニア人が反乱を起こす疑いがあるとして 40 人のアルメニア人が逮捕されている。⁷¹

しかしオスマン帝国のこの態度はアルメニア人の反乱の芽を摘むことにはならず、逆にオスマン帝国に対する反抗意識を強めることになり、彼らの活動は国内外を問わずさらに激化していく。

第二節 アルメニア民族政党的の成立

オスマン帝国のアルメニア人の民族運動はロシアのアルメニア人のそれと連動しており、運動の性格は違ったもののロシア側の運動はオスマン側のアルメニア人に少なからず影響を与えていた。ロシアがクリミア戦争に敗北するとロシア国内でも革命の気運が高まり、ロシアのアルメニア人知識人もその影響を受け帝政打倒を目標とする者が活動を行っていた。⁷²この動きが国境を越えてヴァンやエルズルムなどアルメニア人が多く住む都市まで伝わり、彼らの一体感を強めた。また、民族運動には西欧で教育を受けた裕福なアルメニア人が大いに貢献した。

1880 年代前半から設立が始まった政党的のうち、主なものはアルメナカン (Armenakan) 党、フンチャク (Hunchak) 党、タシュナク (Dashnaktsutiun) 党の 3 政党的である。これらの政党的はそれぞれの性格は違うものの、同時期に活動していた多くのアルメニア人に影響を与え彼らの意識を独立運動へと向かわせた。

1. アルメナカン党

アルメニア初の政党的とされているアルメナカン党は、1885 年にヴァンで結成された。設立者はイスタンブール出身のムクルティチ・ポルトウカリアン (Mekertich Portukalian) ⁷³で

⁷¹ F.O.424/132, No.143[Kamuran 1983, p.128 より].

⁷² 吉村 2009a, 13 頁。

⁷³ Mekertich Portukalian (1848-1921) はイスタンブールのクムカプ (Kumkapı) 地区で生まれた。1860 年代トカット (Tokat) で教師を務める。1870 年代半ばに西部アナトリアとバルカン半島を回り、1878 年にヴァンで学校を設立するが 1 年経たずに閉鎖。1881 年に再びヴァンで開校する。Walker 1980, pp.126-127.

ある。教師であったムクルティチはヴァンで学校を開いたが後に国外退去を余儀なくされフランスに移住した。⁷⁴フランスのマルセイユ (Marseille) に移住したムクルティチはそこで『アルメニア』という新聞を発行し活動を広げ、ヴァンにいる他のメンバーと連絡を取りながら党設立を実現させた。政党の主な綱領には「革命を通し、民族が自らを統べる権利を獲得する」⁷⁵と掲げており、武装訓練を行いゲリラ部隊を創設した。しかし彼らがテロやデモは否定的な見方をしていたことや欧州諸国の介入による平和的な改革を模索していた⁷⁶ことを考えると、他の党に比べ比較的穏やかな思想を持っていたようである。イスタンブールやトラブズンなどヴァン以外の地域にも支部があったが、ムクルティチが国外にいたこともあり、主な活動範囲はヴァン地域に限られたものであった。

2. フンチャク党

アルメナカン党の次に誕生したのがフンチャク（「鐘」の意）党で、1887年にスイスのジュネーヴ (Geneve) で設立された。設立者はアヴェティス・ナザルベキアン (Avetis Nazarbekian)⁷⁷を中心とした西欧帰りの知識人ら数人である。メンバーはロシアのアルメニア人により構成されていた。⁷⁸そのためフンチャク党はロシアのポピュリズム (大衆主義) とマルクス主義に影響を受けた社会主義革命を目指していた⁷⁹。オスマン帝国内のアルメニア人同胞の解放を短期目標として掲げ、独立社会主義国家の建国を長期目標としていた。革命を通してオスマン帝国のアルメニア人が独立を果たした後は、ロシアとイランのアルメニア人をも併合しアルメニア共和国を建国することが彼らの最終目的であった。⁸⁰しかし活動に期待していたほどの効果が表れないと、原因として欧州諸国の支持を十分に受けられなかったことや綱領に掲げていた社会主義は現実的ではないと考える者が現れた。そし

⁷⁴ ムクルティチは自身が開いた学校でアルメニア人革命家を育てているとの疑いをかけられ、1885年3月に学校は閉鎖され、オスマン政府により国外追放となった。Dilşen 2008, p.279.

⁷⁵ 吉村 2009a, 13頁。

⁷⁶ Walker 1980, p.127.

⁷⁷ Avetis Nazarbekian (1866-1939) は裕福な家庭に育ち、パリで学んだ。学生時代にムクルティチが発行していた新聞『アルメニア』でアルメニア人革命に関する記事を書くなどジャーナリストとして活躍。1886年に婚約者のマリアン・ヴァルダニアン (Marian Vardanian) と共にジュネーヴに戻り、そこでロシアのアルメニア人ら4人の学生と知り合う。この4人の学生も新聞『アルメニア』の読者であった。『アルメニア』にはオスマン帝国に住むアルメニア人の状況が説明されていたため、この6人の学生はまだ足を踏み入れたことのないオスマン帝国のアルメニア人を救うための活動を決意する。組織の指導者になってほしいとムクルティチに申し出るが肯定的な回答が得られないと自分たちで新聞を発行するなど活動を始め、1887年8月に党を設立。党設立当時アヴェティスはまだ20代であった。Kamuran 1983, p.130.

⁷⁸ Walker 1980, p.129.

⁷⁹ Richard 1997, p.214.

⁸⁰ Esat 1988, p.682; Richard 1997, p.214.

て1897年には社会主義を主張し続けるナザルベキアン派とこれに反対するアルピアルヤン (Arpiaryan) 派の二派に分かれ、それぞれに活動を続けていくこととなる。⁸¹

3. タシュナク党

19世紀に誕生したアルメニア政党の中で最大の規模を持つのがタシュナク党 (正式名称はアルメニア革命連盟) である。1890年にトビリシで、クリストファー・ミカエリアン (Kristapor Mikaelian)⁸²、シモン・ザヴァルニアン (Simon Zavarnian)⁸³、ステファン・ゾリアン (Stephan Zorian)⁸⁴により設立された。党の性格は、オスマン帝国内のアルメニア人の解放や言論の自由、法の下での権利の平等などを含む点でフンチャク党に類似しているが、マルクス主義を否定している点が違っており、逆に政治分野と経済分野での自由な活動を目指している。彼らにとっての革命とは武力により勝ち得ることができるものであり、オスマン帝国のアルメニア人に武装訓練を行っていた。また「党の障害になる者はトルコ人であろうとクルド人であろうと、どんな状況であろうと見つけたら殺せ。背教者、反逆者、密告者はすべて殺し、復讐するのだ！」⁸⁵というスローガンを掲げており、武力活動を前面に押し出していた。

フンチャク党との大きな違いは、フンチャク党がアルメニア人の完全独立を目指していたのに対し、タシュナク党はあくまでオスマン帝国内での自治権獲得を目標としていた⁸⁶点が挙げられる。⁸⁷またフンチャク党が主に国外のアルメニア人により構成されていたのに対しタシュナク党のメンバーには国内の農民や医者、芸術家などがいたため、より大衆的であったと考えられる。

⁸¹ Dilşen 2008, p.283.

⁸² Kristapor Mikaelian (1859-1905) は東部アルメニアにある Akulis (現在ナヒチェヴァン共和国とアゼルバイジャンに属する) で生まれた。トビリシで学びその後モスクワ大学に入学。そこでシモン・ザヴァルニアンと出会う。Walker 1980, pp.401-402.

⁸³ Simon Zavarnian (1866-1913) はアルメニア北部のロリ (Lori) 地方で生まれた。モスクワで学び、1889年にトビリシに移住。そこでクリストファー、ステファンと共にタシュナク党を設立。党の規約作りに貢献。教師としてムシュ (Muş) へ赴いた後、イスタンブルに定住しアルメニア新聞 *Azadamard* の発行に努める。Walker 1980, p. 426.

⁸⁴ Stephan Zorian (1867-1919) は東部アルメニアにある Tsgghna に生まれた。モスクワにてシモンと同じ学校で学ぶ。クリストファー、シモンと共に党設立を実現する。その後ジュネーヴへ行きアルメニア新聞の編集者となる。後にバルカン半島へ赴きタシュナク党とマケドニア革命組織の協力関係の構築に貢献する。Walker 1980, pp.411-412.

⁸⁵ M.Varandian, *History of the Dashnaktsutiun* (Paris, 1932), p.85[Esat 1988, p.695 より]。

⁸⁶ 実際のところタシュナク党はアルメニア人の独立を目指していたが、ロシアやロシア側の政党の反感を買わないようにするため独立には触れず表面上はアルメニア人の自由獲得を目標としていたという説がある。Esat 1988, pp.694-695.

⁸⁷ Richard 1997, p.216.

第三節 1896年以前に起きたアルメニア人の反乱

こうした状況を受け、1890年から1895年の間にイスタンブルと東部アナトリアでアルメニア人による多くの反乱が発生した。ここではその中からエルズルムで発生したアルメニア人による反乱、そしてフンチャク党首謀によるイスタンブルのクムカプ（Kumkapı）地区で起こったデモとトルコ南東部の都市ゼイトゥン（Zeytun）での反乱を取り上げる。

1. エルズルム事件⁸⁸

1890年6月18日、アルメニア人の学校と教会に武器が隠されているとの噂が広まった。捜索が行われる前、市民擁護団体（Citizen's Defence League）のメンバーが2時間以内に捜索が行われるという情報を広めた。情報が広まるとすぐにアルメニア歴史の教科書やノート、その他疑いをかけられそうな物は別の場所に移動させられた。結果として何も発見されることはなかったが、オスマン側のこの行為はアルメニア人の反感を買うこととなった。アルメニア人たちは店を閉めて抗議し、その間教会に集まったアルメニア人らはこれを機にスルタンへ減税などを要求する嘆願書を書いた。⁸⁹この集会はオスマン側にとって反国家的行動と捉えられ解散が命じられたがアルメニア人はこれに従わず、さらにアルメニア人活動家は住民を反乱へと扇動して回っていた。そのとき1人のアルメニア人が2人のオスマン兵士を殺害する事件が勃発した。事件は2時間続き、翌日領事が町を訪れると、そこには100人以上の死者と200～300人の怪我人がいた⁹⁰。

この事件で兵士を殺害したアルメニア人は捉えられたが後に釈放された。この事件はこれから起こる反乱の第一歩となったが、東部地方で起こった事件であったため欧州諸国の注意を十分に引くことができず、アルメニア人の活動は次の舞台としてオスマン帝国の首都であるイスタンブルに移る。

2. クムカプデモ⁹¹

1890年7月15日、イスタンブルのクムカプ地区でフンチャク党によるデモが行われた。デモの目的は、オスマン帝国内におけるアルメニア人の状況についてオスマン政府とアル

⁸⁸ Esat 1985, pp.713-714. (エルズルム事件の37周年に発行された新聞 *Hairenik* に掲載された記事では Han-Azad という名のアルメニア人が当時の事件を語っており、エサトはこれを引用している。 *Hairenik* はアメリカで発行されていた新聞。)

⁸⁹ 約200人のアルメニア人が教会に集まり、減税や兵役免除費、捜索により神聖を汚された教会の再建、ベルリン条約第61項の履行を要求した嘆願書が書かれた。Walker 1980, p.131.

⁹⁰ 在エルズルム英領事の報告では12人のアルメニア人が死に250人が怪我を負ったと書かれているが、トルコ人の死者と怪我人については触れられていない。 *Turkey No.1, 1890-1, No.66*[Kamuran 1983, pp.143-144 より]。

⁹¹ Esat 1988, p.718;Kamuran 1983, pp.134-136.

メニア教会に訴えることにあった。その日教会には主教と多くのアルメニア人がいた。そこにフンチャク党のメンバーであるジャングリアン (Jangulian) がスルタンに対する抗議文を読み上げ主教に協力を要請した。主教はこれに反対したが脅迫され強制的にスルタンの住むユルドゥズ宮殿 (Yıldız Sarayı) へと連れて行かれた。このデモを止めるためオスマン兵士が駆けつけ宮殿までの道を塞ぎそこで衝突が起こった。このデモでは 2 人のアルメニア人が死に約 15 人が重傷を負った。

このデモは失敗に終わったが、この事件は各国の在イスタンブール領事館に伝わり、また欧州各国にいるアルメニア人の耳にも届いた。このようにデモの目的であった欧州諸国の注意を引くことは達成されたが、同時に事件に関係のないイスタンブール在住のアルメニア人とムスリムの溝を深める原因ともなった。

3. ゼイトウン事件

オスマン政府にゼイトウンで反乱の動きが見られるという情報が届くと調査が開始された。調査の結果、首謀者は反乱を起こすためロンドンからゼイトウンへやって来たフンチャク党のメンバーであるアガシ (Aghasi) というアルメニア人であることが判明した。⁹²彼はゼイトウンの住民に、反乱に必要なお金と武装に必要な武器は準備されていると伝えたという。アガシの反乱計画に共鳴した地元のアルメニア人により、1895 年 8 月から小規模な衝突が何度か起こり、10 月に反乱は本格化した。これに対しオスマン政府はゼイトウンへ軍隊を送り反乱を收拾しようとしアルメニア人を捕え始めた。オスマン軍が派遣されたことにより事件が拡大するのを恐れた欧州各国の大使は翌年 1 月 11 日仲介に入り、1 月 28 日に反乱は終結した。アガシ自身の記録によると、この反乱で約 2 万人のムスリムが犠牲となり、アルメニア側の犠牲者はわずか 125 人であったという。⁹³しかしドイツ人のプロテスタント宣教師レプシウス (Lepsius) は約 6000 人のアルメニア人が犠牲になったと記しており⁹⁴、その数にはばらつきがあるが、犠牲者数の規模はそれ以前に起こった反乱の中では大きかった。

このように 1880 年から始まった反乱は徐々に拡大し、1890 年頃から反乱が各地で本格化し始めた。そして 1895 年にはそのピークを迎え、翌年 1896 年にいわゆる「第一次アルメニア人虐殺」と言われている一連の反乱の中で最も被害が大きかったヴァンでの反乱が起こる。次章ではオスマン帝国東部の都市ヴァンとヴァンで発生した反乱の経緯について考えていきたい。

⁹² Esat 1988, p.746.

⁹³ Aghasi, *Zeitoun* (Paris, 1897)[Kamuran 1983, pp.159-160 より].

⁹⁴ Lepsius, *l'Arménie et l'Europe* (Lausanne, 1896), p.243[Kamuran 1983, p.160 より].

第四章 1896年のヴァンにおけるアルメニア人の反乱

以上、前章ではアルメニア民族政党的結成、そしてフンチャク党首謀の反乱について見てきた。東部アナトリアで起こったアルメニア人による反乱の多くは1895年に起きている。これらの反乱より少し遅れて起こったのがイランとの国境沿いにある東部アナトリアの都市ヴァンでのアルメニア人による反乱である。ヴァンでの反乱は、反乱が本格化する前と反乱後も続いた小規模な紛争も含めるとその期間が最も長く、多くのアルメニア民族政党が関与しており反乱規模が大きかった。また1915年に2度目の大きな反乱が起こったことも考えるとヴァンには他の東部アナトリアとは違った特徴があったことが予想される。

本章ではこれらをふまえ19世紀のヴァン社会におけるアルメニア人の状況とアルメニア人の人口、どのような状況の中でアルメニア人による反乱に至ったのかその原因と経緯を検討する。

第一節 19世紀のヴァン

1. アメリカ人宣教師に見る19世紀のヴァンの社会的状況

東部の中でも特にアルメニア人が多くすんでいた都市としてヴァンが挙げられる。ヴァンは昔からアルメニア人にとって歴史的、宗教的にも重要な都市であった。ヴァンを構成していた地方は主に2つあり、1つ目はヴァン城の南に位置するエスキシェヒル (Eski Şehir)、2つ目はバフチェシェヒル (Bahçe Şehir) と呼ばれる地区である。バフチェシェヒルには19世紀後半からキリスト教徒とムスリムの富裕層が暮らしており、地方政治、経済、宗教の中心地はエスキシェヒルであった。⁹⁵

1871年9月6日ヴァンに足を踏み入れたアメリカ人宣教師ジョージ・C・レイノルズ (George C. Reynolds) は当時のヴァンの様子について以下のように語っている。

街は大きく分けて2つの地区から成っている。壁で囲まれた地区には店などがあり、ここには少数の人が住んでいた。もうひとつの地区はバフチェレルと呼ばれている。ここは街の中心部から4~5マイル離れたところにあった。住民の大部分はここで暮らしていた。男たちは仕事のために毎日もうひとつの地区へ通っていた。⁹⁶

タンジマート改革が始まった頃からヴァンは商業、文化の面で発展傾向にあった。その結果、エスキシェヒルには郵便局、銀行、裁判所、刑務所などの建物が次々と建てられた。

⁹⁵ Hans-lukas 2005, p.139.

⁹⁶ The Missionary Herald, *Van, Easter Turkey*, Eastern Turkey Mission, LXXI, June 1875, p.163[Dilşen 2008, p.130 より].

1878 年以降はバフチェシヒルにも学校やその他の建物が建てられた。⁹⁷教育分野においても、帝国外からのキリスト教宣教師による布教活動の一環としての教育活動が行われ、大きな発展が見られた。

ヴァンの都市部に暮らすアルメニア人は商人、銀行家、翻訳家、医者などの職業に就き生活水準が高かったと言われている。中には政府関係の仕事に従事している者もいた。ヴァン州知事の記録には、1877 年から 1893 年の間に約 70 人のアルメニア人が公的機関で働いていたことが記されている。⁹⁸イスタンブルに住むアルメニア人と同じくヴァンに住むアルメニア人も帝国経済において重要な役割を担っていたと考えられる。

ヴァン周辺に目を向けるとそこには多くのアルメニア人の村があり、都市部に暮らしていたアルメニア人が経済分野で活躍していたのに対し周辺の村で暮らしていたアルメニア人は農業と牧畜で生計を立てていた。広い土地と豊富な草地という地理的な条件から、特に牧畜は発達していたようである。農耕はというと、肥沃な土地であったにも関わらず技術が未発達であったこと、雨量が少なかったことから十分な食物を育てることができず食糧不足に見舞われることも度々であった。⁹⁹

2. ヴァンの人口構成¹⁰⁰

ヴァンの人口はオスマン政府によると 1890 年の時点でムスリムが 282,582 人、アルメニア人は 55,912 人である。また 1893 年に行われた一斉調査では 1890 年前後の人口はムスリムが 119,860 人、アルメニア人は 60,448 人である。イギリス領事ロイド (Lloyd) によると 1890 年時点でムスリムの人口は 115,000 人、アルメニア人の人口は 75,988 人である。これらの調査によると 1890 年頃のヴァンにおけるアルメニア人の人口は 50,000 人から 75,000 人の間で推移していたと考えられる。またアルメニア人による人口統計もあるが、彼らは自治権獲得のため自分たちの人口を誇張する傾向があったため信用度は低い。

東部の他の都市の人口を見てみると、エルズルムのアルメニア人人口は 100,000 人～130,000 人と見られている。ビトリスのアルメニア人人口もエルズルムとほぼ同じであることから、ヴァンのアルメニア人の数がとりわけ多かったわけではない。しかしヴァンの全人口に占めるアルメニア人の比率を見ると約 50%であり、さらに後にロシアやイランから国境を越えヴァンに侵入したアルメニア人も含めるとその比率は一時的に高くなったと推測される。

⁹⁷ Hans-lukas 2005, p.139.

⁹⁸ Dilşen 2008, p244.

⁹⁹ Dilşen 2008, pp.238-239.

¹⁰⁰ Kamuran 1983, pp.97-100.

第二節 反乱前夜のヴァン

1896年の反乱は東部アナトリア最大のものとなった。それでは、ヴァンは他の東部都市と比べ大きな反乱につながるどのような状況にあったのだろうか。その特徴としては次の4つが挙げられる。

1つ目は、革命家の運動が活発であったことが挙げられる。ヴァンで結成されたアルメナカン党を始め、タシュナク党やジュネーヴやロンドンに拠点を置くフンチャク党もヴァンで活動を行うなど、ヴァンではアルメニア人の組織化が進んでいた。ヴァンにはフンチャク党のメンバーが50人、タシュナク党はというと400人を超えるメンバーがおり、¹⁰¹特にテロ活動を行っていたこれらのメンバーはアルメニア人の同胞を扇動して回っていた。これに影響を受けたのは農村部のアルメニア人であった。彼らは貧しさとクルド人の暴動に悩まされており、以前から不満を募らせていたため革命思想を受け入れ彼らと行動を共にする傾向があった。

2つ目の特徴はヴァンが東部アナトリアの中で発展した都市であったことが挙げられる。特に教育面は進んでおり、1869年アルメニア教会総主教になったフリミアンは総主教任命前の1850年代の終わり頃学校を設立し新聞を発行した。またヴァンにはアルメニア人学校が11校あり、そのうち6校は修道院と密接な関係をもっており、4校は私立学校、1校は女学校であった。アルメニア旅行記を書いたリンチ(Lynch)はこの11校で計2180人の生徒が教育を受けており、そのうち800人は女子生徒であったと報告している。¹⁰²アルメニア人学校では授業で欧州諸国から集められ翻訳された本が教科書として利用されていた。授業のカリキュラムを見てみると、言語や文学の他に自然地理学、数学、解剖学、歴史の授業が行われていたことがわかる。特に歴史、地理、文学の授業ではアルメニアの歴史が教えられ、教科書ではカスピ海からオスマン帝国南東部の都市アダナ(Adana)に至るまでの地域がアルメニア人の土地であると示されていたことが確認されている。¹⁰³これらの授業により学校で教育を受けていたアルメニア人の民族意識は高まったと考えられる。またアルメナカン党の設立者ムクルティチもヴァンで2度学校を設立しており、そこで学生に革命思想を教えていた。それに影響を受けた生徒が党設立に貢献したのは第三章で述べた通りである。

3つ目の特徴としてアメリカ人宣教師の活動が活発であった点が挙げられる。1850年代に始まった東部アナトリアでの宣教師の活動は1860年代から1880年代に最も盛んに行われた。ヴァンに最初のアメリカ人宣教師の支部が設立されたのは1872年である。アメリカ人宣教師は布教活動の基本として教育を重視していた。このためヴァンに住む非ムスリムの学校を発展させるため教員を支援し金銭面での援助も行っていた。こうすることで布教

¹⁰¹ *Turkey* No 8(1896) No 117, ek1[Kamuran 1983, p.161 より].

¹⁰² Henry Finnis Lynch, *Armenia: Travels and Studies* (Beirut, 1965), pp.9697-98[Dilşen 2008, p.182 より].

¹⁰³ Dilşen 2008, p.184.

活動に対する地元の住民や聖職者の反発を防いでいたのである。¹⁰⁴ヴァンにプロテスタントの学校は4校確認されている。¹⁰⁵ヴァンに住むアルメニア人はオスマン帝国により設立された学校で教育を受けることが可能であったにも関わらず、通常はアルメニア人学校または宣教師が開いたプロテスタントの学校に通っていた。布教活動の一環としてアメリカ人宣教師が開いたこれらの学校では、主に貧しい村の若者が教育を受けていた。ここでは西洋の自由主義思想が教えられており、¹⁰⁶後にここで教育を受けた若者が村へと戻りこの思想を広め反乱に影響を及ぼしたと考えられる。

4つ目の特徴としてイラン、ロシアに近かった点が挙げられる。特にイランとは国境を接しており、イランからヴァンへ侵入し武器を持ち込むアルメニア人が後を絶たなかった。イラン側にはサルマス (Salmas)、ヘフタン (Heftan)、ハッソヴァ (Hassova)、ディラム (Dilam)、カレヒサル (Kakehisar) のようなアルメニア人の村々が国境沿いにあったことでアルメニア人は容易に国境を越えることができた。国境を越えオスマン帝国領に侵入するアルメニア人の数は1895年から増加傾向にあり、オスマン兵との衝突もそれに伴い激化した。¹⁰⁷国境沿いで起こった事件にタシュナク党の紋章が入った武器が発見されており、アルメニア民族政党が関与していたことも確認されている。¹⁰⁸

この状況に対しオスマン側は対策としてイランとの国境を管理下に置く決定を下した。アルメニア人活動家が国境沿い付近で行動を起こした際には素早くヴァンにいる軍に知らせ、ヴァンに入る前に兵が対応するという措置も取った。¹⁰⁹しかし国境を越えるアルメニア人を防ぐのに十分な兵の数が用意できなかったため衝突の大幅な軽減には繋がらなかった。

このように国境沿いで頻発していた事件は1896年春にヴァンの様々な地域へと拡大していったのである。

第三節 ヴァンにおける反乱

ヴァンでの事件は1895年秋から増加傾向にあり、翌年春には小規模な反乱は徐々にその勢いが加速していった。ヴァンのアルメニア人は反乱に必要な武器を購入するため同地域のアルメニア人同胞に対し「武器税」を課し、反抗する者には死をもって脅した。¹¹⁰また

¹⁰⁴ Dilşen 2008, p.182.

¹⁰⁵ Dilşen 2008, p.192.

¹⁰⁶ Dilşen 2008, p.181.

¹⁰⁷ Dilşen 2008, pp.296-297.

¹⁰⁸ Dilşen 2008, p.297.

¹⁰⁹ Dilşen 2008, pp.299-301

¹¹⁰ Esat 1988, p.755.

アルメニア人はヴァン都市部の裕福なアルメニア人同胞を襲い金銭を略奪していた。¹¹¹実際のところ都市部に住む裕福なアルメニア人は現状に満足しており、ムスリムに対する反乱に賛成ではなかったという。このため反乱を推し進めていたのはロシアやイランから来るアルメニア人、そして彼らに先導された貧困層の村人のアルメニア人であったと見られている。反乱に協力的ではなかったアルメニア人も反乱首謀者の犠牲者となったのである。

事件の始まりは 1896 年 6 月であった。ヴァンのイギリス領事ウィリアムズ (Williams) はこの事件を次のように語っている。

6 月 2 日から 3 日にかけての夜中、ヴァンの通りで巡回中の兵士が襲撃された。これにより士官と兵士が重傷を負った。ムスリムの忍耐と我慢も限界に達した。この事件の原因は愚かなアルメニア人にある。私は何度も彼らに子供じみた攻撃では何も得られない、そのような攻撃はやめるよう忠告していた。この状況はもはや絶望的である。¹¹²

次の日アルメニア人商店主らはいつも 10 時に開けることになっている店を開けず、外との連絡を断ってしまった。その日夕方 4 時まで誰一人として町に姿を見せず、町は静まり返っていたが、事件はその日の夕方起こった。¹¹³バフチェレルから家に帰る途中のムスリムが道で襲撃された。その道の両側はアルメニア人の家々が建ち並んでおり、アルメニア人が家の中から発砲し、アルメニア人同胞がそれに参戦し事件は拡大した。すぐに兵が駆け付け仲介に入り事件が拡大するのを防ごうとしたが、アルメニア人は武器を手放さず説得に応じる姿勢を見せなかった。レイノルズもこのときの事件を次のように語っている。

6 月 3 日月曜日、銃声が近くで聞こえる。町が今どのような状況なのかかわからない。ここ何週間かで事件が終わりを迎え状況が平穏に近づいたという希望を持ったのだが、家は襲撃され続けている。昨日夜中に近くで銃声になり目を覚ました。銃声は数分続き、事件を知らせる鐘の音が 30 分間鳴り続いた。その後すぐに士官と兵が運ばれていくのを目にした。¹¹⁴

¹¹¹ 1896 年 3 月 9 日商人の息子オハネス (Ohannes) がソコ (Soko) という名のアルメニア人に殺されている。また同日夜、ヴァンのシャバニエ (Şabaniye) 地区でヴァハン (Vahan) とカラベト (Karabet) という名の 2 人のアルメニア人が金銭を盗まれた後に殺害された。さらに 3 月 11 日夜中に 3 人のアルメニア人が襲撃され金銭と武器を盗まれた。Dilşen 2008, pp.329-330.

¹¹² Blue Book, 1896, p.41, 67, 207[Esat 1988, p.757 より].

¹¹³ BOA, Babıalı Evrak Odası Sadaret Mektubi Kalemi, Mühimme Kalemi, Dosya no.668, Gömlek no.1, Lef no.115-16-17, 3 Haziran 1312/15 Haziran 1896[Dilşen 2008, p.338 より].

¹¹⁴ Dilşen 2008, pp.341-342, Hans-lukas 2005, p.310 にも同じ記述が見られる。そこでレイノルズは「この事件は誰の間で起こったのかを理解するのは難しい。私の予想では、兵と衝突したのはクルド人である。しかしトルコ人はこれをアルメニア人革命家の仕業とし、後に行われる恐るべき行動の言い訳を作ったのだろう」と言葉を続けている。

アルメニア人活動家の襲撃により始まった反乱の知らせを受けると、すぐにオスマン軍が派遣された。またムスリムとアルメニア人の両方が居住していた地域とムスリムの居住区の近辺では何百ものムスリムとアルメニア人、軍と一般市民が衝突を起こした。¹¹⁵後にこの紛争は周辺地域に拡大し、6月3日から11日の間絶え間なく続いた。

オルギュル (Olgüllü) 村でアルメニア人がスレイマン・アー (Süleyman Ağa) とメフメト・アー (Mehmet Ağa) を殺害するという事件は6月5日から7日まで続き、この事件で12人のムスリムと205人のアルメニア人が命を失った。

クヴァシュ (Kuvaş) 村では武装したアルメニア人の襲撃で4人のムスリムと100人のアルメニア人が犠牲となった。さらにシタク (Şitak) へ逃げたアルメニア人との衝突では15人のムスリムと30人のアルメニア人が犠牲となった。¹¹⁶

この反乱ではアルメニア人側の被害も大きかった。反乱の開始から2日後の6月5日、アルメニア人は安全を求め宣教師の家や学校へと避難した。これらの建物はアルメニア避難民で瞬く間に溢れかえった。避難民の中には重軽傷合わせ多くの怪我人が確認されており、アメリカ人宣教師のレイノルズとキンボール (Kimball) がこれに対処した。このときのアルメニア避難民の様子はレイノルズの記録に詳細に残されている。

人混みがここまで流れ始めた。助けを求め私たちのところへと溢れる人々の洪水には、男も女も子どももいる。彼らの多くには寝る場所も食べ物もない。女学校も入口まで溢れ、おそらく中には400~500人いる状況であろう。男子校はというともっと混雑している。私たちの土地で空いている場所には時間が経たないうちに人々でいっぱいになった。(中略) この人混みの中には多くの怪我人がいた。キンボールと私は怪我人を見るため午前中から腕をまくり、夜中まで息をつくことができなかった。¹¹⁷

さらにアルメニア人の家々やアルメニア人の村の大部分はムスリムにより襲われ破壊された。これらは「革命家の活動への罰」としてオスマン政府からの命令によるものであった。¹¹⁸

6月6日この反乱に対処すべくイギリス、フランス、ロシア、イランの領事が仲介に入りアルメニア人の説得を試みた。しかしアルメニア人は説得には応じず、8日に再び銃撃戦が始まった。6月9日と10日アルメニア人の家々からの発砲がおさまるとアルメニア人が逃

¹¹⁵ Grave Kimball, *Massacred at Van*, Lend a Hand, Vol:17, No:3, September, 1896, p.191[Dilşen 2008, pp.340-341 より].

¹¹⁶ Kamuran 1983, p.163.

¹¹⁷ Raynolds'un Van'dan 23.6.1896 tarihli yazısı, p.2, ABC bh, 1896 Reports[Hans-lukas 2005, pp.311-312 より].

¹¹⁸ Raynolds'un Van'dan 23.6.1896 tarihli yazısı, p.5, ABC bh, 1896 Reports[Hans-lukas 2005, pp.311-312 より].

亡したことが判明した。逃亡したアルメニア人のうち 780 人から成るグループがハミディ (Hamidi) 地区を抜けエルバク (Elbak) 村を襲撃するとオスマン軍が派遣され、アルメニア人との間で衝突が起こった。さらにタシュナク党とフンチャク党から成る 286 人のグループはハミディエ (Hamidiye) 地区のサルハーネ (Salhane) 村を襲撃した。近くの地区にいた兵がすぐに駆け付け、さらに事件の知らせを受けるとヴァンからも援軍が送られ多くのアルメニア人が犠牲となった。この衝突で生き残ったアルメニア人は 1 人だけであると伝えられている。¹¹⁹

このように、6月3日から11日までの1週間で合計418人のムスリムと1,715人のアルメニア人が命を失った。レイノルズやウィリアムズの証言から事件の発端である6月2日に攻撃を仕掛けたのはアルメニア人であると考えられる。しかしこれに対しオスマン軍が派遣されたことでアルメニア人側は大きな被害を受けた。また東部には、アルメニア人独立を阻止するためアブデュルハミト2世の命により編成された「ハミディエ (Hamidiye)」と呼ばれる武装集団があり、この集団もアルメニア人に大きな打撃を与えた。¹²⁰このように武装訓練をただけのアルメニア人活動家の攻撃に対しオスマン軍が対処したことでアルメニア人側の犠牲者数が多くなったと考えられる。つまり、犠牲者の数のみで判断しこれを「ムスリムによるアルメニア人虐殺」とするのは正しいとは言えない。イギリス領事ウィリアムズは「私のところには多くの罪のないムスリムがアルメニア人によって殺されたということを証明する文書がある。(中略) 彼らはロシアやヨーロッパの新聞に書かれているようなことはしていない」¹²¹と述べており、ここからムスリムの一般市民も紛争に巻き込まれ被害を被ったことがわかる。

反乱の結果、レイノルズが「この街は何と変わってしまったことか！数月前までの落ち着いた平和な家々はもはや廃墟となってしまった」¹²²と語っているように、ヴァンの都市部と周辺の村々は大きな被害を受けた。そしてこの事件後ヴァンに住むアルメニア人とムスリムの関係はさらに悪化したのである。

7月に入ると事件の收拾を図るため、オスマン政府は欧州諸国の領事へ仲介に入るよう要請し書簡を送った。そこにはオスマン政府がアルメニア人の処遇を決定するまでは欧州諸国にアルメニア人を監督する権利を与える旨が書かれていた。これを受け各国領事は以下の条件をアルメニア人活動家に提出している。¹²³

- ①名誉あるフランス大使の仲介の下、スルタンはすべての反乱者の生活を保障する。
- ②直ちに領事に降伏した場合、列強はいかなる責任も問わない。

¹¹⁹ Kamuran 1983, p.162; Dilşen 2008, pp.363-366.

¹²⁰ Nazım Paşa, *Ermeni Olayları Tarihi* C. II (Ankara, 1994), p.300[Hans-lukas 2005, p.313 より].

¹²¹ Blue Book, 1896, p.41, 67, 207[Esat 1988, p.757 より].

¹²² Dilşen 2008, p.168.

¹²³ Esat 1988, pp.758-759. () 内は筆者の捕捉による。

- ③スルタンは明日 2 時までにはすべての武器を放棄することを望んでいる。
- ④村と郊外地域に住むキリスト教徒とムスリムをクルド人の攻撃から保護するため、領事の同意の下哨兵線が定められる。
- ⑤降伏した者は全員（ヴァン）城へ送られる。
- ⑥監禁中に領事が城を訪問する。政府による適切な待遇を我々領事が保障する。

しかし欧州諸国の領事の仲介にも関わらず活動家らは山岳地帯へ逃亡した。アルメニア人歴史家ヴァランディアン (Varandian) ¹²⁴によるとアルメニア人反乱者の逃亡は次のような結末を辿った。

ヴァンを去った反乱者はあらゆるルートでイランへと向かった。200 人から成るアルメナカン党の武装メンバーはアヴァディシアン (Avadisian) をリーダーとし、アグパク (Agpak) のルートをとった。125 人のタシュナク党の武装メンバーは二手に別れ、片方のグループはオスマン帝国内に残り、もう片方の 85 人から成るグループはベド (Bedo) というリーダーの下イランとの国境へ向かい、そこでマルディク (Mardik) をリーダーとしたフンチャク党のメンバー 28 人と合流した。彼らはカラヒサル (Karahisar) 山の近くでクルド人、アッシリア人と衝突し、1 日中続いた争いでほぼ全滅してしまった。アルメナカン党から成るグループも同じ運命を辿った。ヴァルタン (Vartan) 率いる一隊のみがそのような災難を回避しようとしたのである。¹²⁵

このように逃亡したアルメニア人の一部はクルド人との紛争に巻き込まれ、一部はオスマン軍により捕えられた。しかし逃亡に成功したアルメニア人活動家らは再びヴァンを襲撃するために再度準備を始め、1896 年 7 月以降も大きな反乱には繋がらなかったものの小規模な衝突が繰り返されていくのであった。そして周知の通り、約 20 年後の 1915 年にヴァンはアルメニア人とトルコ人にとって再び悲劇の舞台となるのである。

¹²⁴ Mikayel Varandian (1872-1934) はジュネーヴ大学で学んだ。タシュナク党に参加した後ジュネーヴに定住。タシュナク党紙 *Droshak* の作成に貢献した。著書に『タシュナク党の歴史 (全 2 巻)』がある。Walker 1980, p.422

¹²⁵ Esat 1988, p.759.

第五章 結論

アルメニア人の独立意識は 19 世紀後半から高まった。当時 1848 年のフランス革命がヨーロッパの周辺諸国に影響を及ぼす中、パリで教育を受けたアルメニア人がオスマン帝国へと思想を持ち帰り、また近代化を目指すタンジマート改革とも相まって民族主義思想がアルメニア人社会に広がった。オスマン帝国が衰退の道を進む過程で帝国内の他のキリスト教諸民族が反乱を起こす中、いかにアルメニア人がオスマン帝国との中で比較的平穩に暮らしていたとはいえ自治権獲得のため行動を起こすのは当然の行為であった。

そもそもこのアルメニア人の運動をロシアとイギリスが支持したのは、両者の要求が一致した結果であった。南下政策のルートにバルカン半島が使えないと判断し東部アナトリアに目を向けたロシアはアルメニア人に目を付け、アルメニア人もバルカン半島のキリスト教徒を援助していたロシアに親近感を持っていた。イギリスはというと、ロシアの南下により不利益を受けることを懸念したためアルメニア人を利用する策に出た。アルメニア人たちはオスマン帝国からの独立、少なくとも自治権を獲得するためオスマン帝国と関係が良好なイギリスにも接近し、ロシアとの敵対関係を利用するなどベルリン条約後の 3 者は常に駆け引きの中にいたのが見てとれるだろう。

オスマン帝国はというと、アルメニア人を支持し東部改革を主張していたイギリスの継続的な圧力に反抗する力を持っておらず、東部改革を履行する姿勢を見せていた。アナトリア東部に調査団を派遣し対策を考えるなどオスマン帝国は改革を進めることで分離を防ぐ手段をとったが、財政が困窮していたことや首都イスタンブルから遠く問題意識が低かったこともあり、肝心の改革は一向に進展を見せなかった。

当初平和的手段で自治権獲得を目指していたアルメニア人が武力解決に走ったのは、それが常に彼らの手本となっていたバルカン半島のキリスト教徒がとっていた方法であったからであろう。とにかくアルメニア人の反乱の目的は一貫して「欧州諸国の注意を引くこと」にあったのは、これまで述べてきた通りである。

この反乱を実際に扇動したのはロシアのアルメニア人であった。イギリス領事のグレーヴス (Graves) はアメリカ人新聞記者シドニー・ウィットマン (Sidney Whitman) の「もしアルメニア人革命家がこの国 (オスマン帝国) へ来ることがなく、反乱へと扇動することがなかったとしても、これらの衝突は起こったと思いますか」という質問に対し「もちろん答えは『ノー』です。ただの 1 人もアルメニア人は殺されることがなかったと思います」と答えている。¹²⁶強大なロシア帝国からの独立は困難であると悟ったロシアのアルメニア人は、「同胞をオスマン帝国から救う」という口実で国境を越え東部アナトリアへ武器と共に侵入し、帝国内のアルメニア人を扇動して回り反乱へと導いたのである。実際のところ反乱を起こす理由はロシアのアルメニア人の方により多く見られた。第三章で述べ

¹²⁶ Sidney Whitman, *Turkish Memoirs* (London, 1914), p.74, 93-94[Esat 1988, p.677 より].

た通り、ロシア人のナショナリズムが高まる中で抑圧されていたのはロシアのアルメニア人であったからである。しかし彼らがロシアで反乱を起こさずオスマン帝国へ侵入し帝国内の同胞を扇動して回ったのは、オスマン帝国のアルメニア人は「アルメニア問題」の国際化にすでに成功しており、オスマン帝国で運動を起こす方が成功につながる可能性が高かったとの判断からであろう。アルメニア人の力だけでこの反乱が実現したのではなく、背後にはロシアの援助があったことは否定できない事実である。ロシアはアルメニア人が単に独立を目指していたときは一度援助の手を引いていた。しかし帝国内でアルメニア人の反乱を望んでいたロシアがアルメニア人活動家の援助を拒否する理由は見当たらない。実際ヴァンにおける反乱ではロシア製のライフルが確認されており、またヴァンのロシア領事館の近くでアルメニア人活動家による武装訓練が行われていた¹²⁷など、この反乱がロシアの承認済みであったことは明白である。

オスマン帝国東部の都市ヴァンでは、ヴァンで結成されたアルメナカン党を始めフンチャク党やタシュナク党の組織化が進んでおり、これらの民族政党が活発に活動を行っていた。特にイランと国境を接しており、ロシアに近いという地理的条件からアルメニア民族政党のメンバーが国境を越えオスマン帝国内に侵入し、同時に反乱に必要な武器も持ち込まれていた。またヴァンは東部アナトリアの中では発展した都市であり、特に 19 世紀後半から教育面における顕著な発展が見られた。アルメニア人学校ではアルメニアを中心とした歴史や地理の授業から民族意識が高まった。さらに 1872 年にヴァンで活動を開始したアメリカ人宣教師が布教活動を行うにあたり、アルメニア人学校の援助を推進した。またプロテスタントの学校を開校しアルメニア人に教育の場を提供し、そこで西洋思想を広めたことも反乱に影響を与えたと考えられる。

これらの特徴を背景に他の東部都市より少し遅れて 1896 年 6 月、アルメニア人活動家の行動によりムスリムとの衝突が発生し、それをオスマン軍が鎮圧したため多数の犠牲者が出た。オスマン軍を前に武装訓練をただけのアルメニア人の犠牲者数がムスリムのそれを上回るのは反乱の一結果として見るべきである。当然これだけの犠牲者が出た後でオスマン側の正当性を証明するのは不可能であるが、この事件をオスマン政府による計画的、意図的なアルメニア人虐殺、ましてやジェノサイド（集団虐殺）と定義するのは見直される必要があるだろう。

以上見てきたように、ヴァンの反乱は国際関係とそれぞれの立場からの利害に基づく行動の結果として発生したと判断される。

本稿では資料の多くを二次資料に依拠しており、一次資料には手が届いていない。一次資料を利用しながら、1896 年以降のアルメニア人の活動や 1915 年の事件が起きた背景、経緯などについて明らかにすることを今後の課題としていきたい。

¹²⁷ Esat 1988, p.756-757.

参考文献一覧

(日本語文献)

上野雅由樹 2009 : 「タンズィマート期アルメニア共同体運営組織の展開ーミット憲法成立過程の考察からー」『東洋學報』第 91 卷第 2 號

吉村貴之 2009a : 『アルメニア近現代史』東洋書店

吉村貴之 2009b : 「故郷を創るーアルメニア近代史に見るナショナリズムとディアスポラ」、臼杵 陽監修、赤尾光春、早尾貴紀編『ディアスポラから世界を読む』明石書店

(外国語文献)

Bilal N. Şimşir 1982 : *British Documents on Ottoman Armenians: Volume I (1856-1880)* (Ankara; Türk Tarih Kurumu Basımevi)

Bilal N. Şimşir 1989 : *British Documents on Ottoman Armenians: Volume II (1880-1890)* (Ankara; Türk Tarih Kurumu Basımevi)

Christopher J. Walker 1980 : *Armenia The Survival of a Nation* (London; Croom Helm)

Dilşen İnce Erdoğan 2008 : *Amerikan Misyonerlerinin Faaliyetleri ve Van Ermeni İsyancıları(1896)* (İstanbul; IQ Kültür Sanat Yayıncılık)

Esat Uras 1988 : *The Armenian in History and The Armenian Question* (İstanbul; Documentary Publications)

Hans-Lukas Kieser 2005 : *İskalanmış Barış* (İstanbul; İletişim Yayınları)

Kamuran Gürün 1983 : *Ermeni Dosyası* (Ankara; Türk Tarih Kurumu Basımevi)

Nurşen Mazıcı 2007 : *Uluslararası rekabette Ermeni sorunu'nun kökeni: 1878-1920* (İstanbul; Pozitif Yayınları)